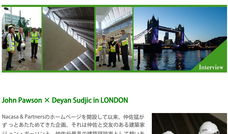


John Pawson × Deyan Sudjic in LONDON

Nacasa & Partnersのホームページを開設して以来、特徴盛が ずっと あたためてきた企画、それは伸縮と交友あるる建築家 ジョン・ポーソンと、伸縮性建築関係誌として知られ 著せるデザイン・スジックの対談。

晩夏のロンドン、2016年11月のオープンを目指して工事が進 行中の新しいデザインミュージアムの建設現場にて、開長で あるデヤン・スジックと恒温建築家のジョン・ポーソンが顔 うかたちで、その対談はついに実現した。（2016年10月）

文：山下めぐみ（フリーエディター）
写真：鳥井良司（株式会社ナカサアンドパートナーズ）
編集：大原信子（株式会社ナカサアンドパートナーズ）

01. 1980年代の出会い
02. ハイテクとミニマル
03. デザインミュージアムの移転
04. コンペへの挑戦
05. 待望のポーソン初公共建築

01. 1980年代の出会い

ー今回、特急なかや伸伸はこの対談に来られずしてしまった。お二人の拠点であるロンドンで、しかもこのタンジェントで直行中のポーソンとデザインミュージアムの現場にて、スジックさんとポーソンさんの対談が実現できたことを大変嬉しく思います。

John Pawson（以下P）：伸伸さんはこの年代に東京でレクチャーをした時に初めておあいしました。私のためにパーティーを開いてくれてた。私たちの関係は彼から写真を通して始めてとは言っても、私が日本に滞在していた1年代から、彼の名はよく目にしました。伸伸さんは日本だけでなく世界の建築を見に出かけていました。

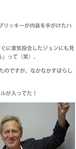
Deyan Sudjic（以下D）：私も80年代プルーフリット誌で初めて日本の建築とデザインの特集をしました。伸伸さんが建 設したプラスチックタイルをあしらった一つ組ぶ示二天の作品の写真を使ったことを覚えています。

ー二人の出会いから教えて下さい。

D：だからギャラリーのドアハンドルの写真を使ったりして記事にしました。

D：そう、金属史的のデザインでしたドアハンドルをね。

D：あれも金属史的のアイディアでした。1970年代末に日本で出会い、私に建築の道に進むきっかけを あたえてくれたのが金属さんでした。彼がロンドンに来たときに、改装中のアパートメントを見せて、 どうするか聞いたんです。そしたら、自分ならビンに 近まって、ひっくりしましたわ。



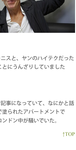
D：：ジョンがロンドンのコーク・ストリートにあるレスリー・ウォディントン・ギャラリーをデザインしたときに、プルーフリット誌の編集をしていて また、記事にしてくれたかや、ということで、ジョンから手紙と写真が届いたんです。それでギャラリーで会うことになりました。1980年のことです。

T：：それでギャラリーを見に来たものの、デヤンは これでは建築とどこの記事にはならないと、基本的 に白い空間だったので。

D：：だからギャラリーのドアハンドルの写真を使ったりして記事にしました。

T：：そう、金属史的のデザインでしたドアハンドルをね。

D：：あれも金属史的のアイディアでした。1970年代末に日本で出会い、私に建築の道に進むきっかけを あたえてくれたのが金属さんでした。彼がロンドンに来たときに、改装中のアパートメントを見せて、 どうするか聞いたんです。そしたら、自分ならビン に近まって、ひっくりしましたわ。



TOP

02. ハイテクとミニマル

ーそのころ、デヤンさんはフューチャーシステムズのヤン・カプリッキーが内装を手がけたハイテクなオフィスのフラットに住んでいたのですね？

D：：まもなくそのフラットに引っ越すことろでした。会ってすぐに家見せたしブジョンにも見 に来てもらったとき、「好みではないが、非常によくできてる」って（笑）。

T：：その後、デヤンの愛称中に、ジョンにとっては、ミニマルなデザインは、たかなかずはなじ いフラットでした。とても感心性がよかった。

D：：そのフラットに戻ったら、冷蔵庫にいっぱいキリンビールが入ってた！

T：：日本のビールが好きなもので、当時はなかか 買えなくて、まとめて買い貯めするしかなかったんです。

D：：ビールのデザインも美しかった。

ー後のマンの作品を考えると、かなりミニマルなデザインと言えます？

T：：確かに、ミニマリストのものです。スタイルに 関わらず、よく作ったものはは好きです。

D：：当時、最もジョッキング氏たちインテリアがビンクのコーニスと、ヤンのハイテクだったのは、スペースシップの出ホ心地はどうと聞かれることはしなかっていたわ。 ジョンはそう は言わなかったが。

T：：そんな風には見なかったからね。

D：：実はジョンの作品は世界ワールド・オブ・インテリアで記事にしていて、なにかと話 題になっていました。天井と壁の間のコーニスの部分がビンクで塗られたアパートメントです。いったいなぜジョンはあそこをビンクに塗ったのかって、ロンドンの中心にいたら。

TOP

03. デザインミュージアムの移転

ー出会った当初から私が思った、ということのようですね。初めて二人で仕事をしたのは、いつですか？

D：：1999年にクラスゴーの建築家ティンスタッシュ ョンを頼んだのが最初でしたはず。その前と、私がデイレクターを務めたウェネチア・建築ビエンナレ ーの展示デザインをお願いしました。

ーテムズ川のほとりから高級住宅地のテンソンコン ナハイスストリートへ。なぜデザインミュージアム は移転になるのですか？

D：：1999年にオープンした博ミュージアムが手狭に なったからです。私がディレクターになったのは2007年ですが、当時、テートモダンに隣接する土 地を買って、タービンホールの後ろに新築する部分 時もようやくでした。1年は才能が開花した頃。 の場所を見し始めたのですが、そこへコモンウェル スーイスタイトートを建ましたんディベロッパー から話が来たんです。

ーコモンウェルス・インスティチュートとは？

D：：コモンウェルスに属するのに加ったそれが最初なたすることです。（コモンウェルスーイギリス連邦、大英帝国下の国は結果）1968年からその国はCRMMOの設計で建てた。2002年から開館になっていましたが、グレードIIの歴史的建造物に指定されています。

D：：この建物と周辺の土地を頼まれた工事総責者は、再開発を指揮してOMAにマスタープラ ンを依頼しました。そのその実績の集合住宅棟を建てる所を得るには、このアイコンの開発 を要請しし、文化施設として直接する必要があるのです。それでデザインミュージアムは17年 間家賃ゼロ、プラス修復費としての25万ポンド（3億円弱）を手付すると言ってきた。そこで 話に乗ったわけです。ミュージアムの現り返 集合住宅は建設中なはそのままで、OMAがデザ インを手がけています。

TOP

04. コンペへの挑戦

ー2009年に新敷地策定を公表したとき、スジックさ んはポーソンさんにコンペに出ようと思ったことは ありましたか？

T：：非常に小さな声なから、「コンペに出してみて はどうか」と提案を言われたので、乗ってはさまし た。私は建築コンペには参加したいのですが、一 出 出すと決めたら、とことんやりたい。それにチャ スの用具がつ ってきてくれたのは、みんながコンペ のためにの実績くず力を注ぎ、オフィスはほとんど でないエキサイティングな雰囲気が充実してい た。勝ちは目標と思っていたので、勝つためには 努力を注ぎ込むべきだと思っていました。コンペは 建築のプロセスを学ぶ場でもあるから、アイディアを 提案するだけ と言うのです。アイディアはすべて の工程の結果、10人の建築員にそのアイディアを伝え ることは容易ではなかったです。

ジョンボーソンオフィス

D：：このコンペも現実的なものとして考えるる部がありま す。必ず勝てると信じて挑まないこと、ですね。

T：：一番苦しかったのが、最終候補にアイビッド・チャ ッフィーフィールドと残った時、最終のプレゼンテーションのため、模型を乗せたクルマで移動していたら、 開にライトバンが停まり、中から私のオ ー5倍はあ ったような大柄なエンジニアがビュッと飛び出たんです。もうこれまで、 負けた、と思いました。デイビッドの顔はとてもはかったです。

D：：建築家たちがこうしたコンペのプロセスに挑むことは、 毎度緊の下がります。かなりの確率で「負ける」という 場合を受けるわけなので。

T：：どんなに非勝なんであっても、実を現実のものはま 出にくいですよ。感傷的になり、情 つくるから、 建設できるために、負けることを嫌くないからしたまいんだ。 辛い、今回はそんな 痛みを受けて 高みまでした。今回、コンペの最中、デヤンはいつもも 嘆して 高野でしたね。 コンペのことは一切しゃべらなかった。

D：：もはょうからないい仕事をすると言っていたようこ とです。そしてその通りになりました。

T：：デヤンは建築をしてもるのを見ているのは、そして 頃の回転が早くて 頼いの下。とても 助かっています。 万事ダムーズに進みますから、デヤンも、私のオフ ースのすべてに自由に アウセ ドを与えて、仕事が 長い ものは ワたし、 ゴ 人 ス ペ ー ス で、 ゴ ル 高 間 し ん な に 気 を つ け ま す。

TOP

05. 待望のポーソン初公共建築

ー新しいデザインミュージアムはポーソンさんにと って、これまでで一番大きなプロジェクトですか？

T：：予算的には最大ではないですが、私にとって初 めての公共建築なります。これまでは私がかか ったのでこれてようやく一般の人に私の作品を見 てもらうことができます。それにロンドンなので話 題しやすいかな。

D：：実は私はこのあたりで育ったんです。子供のころから この建物が好きで、よく遊びに来たものです。 戦後、建設資 材の間材が無駄なくて建てられたもので、当時流行 ったハイポリック・パラボイドシェ ェル構造の建築物 現在で、サーペンタンのパビリオンやテートギャ ル、四下の代々 木体育館には及ばずもが、同様の建築です。ピ ールがはなくモルタルです。

D：：屋根はハンカチーフを広げて真ん中をつまんだような形 で、建物の公園側の2面は透明なガラス張りに、あとの2 面は異色仕様にしているので、眺りガラス張りになりま す。内部の中央は建築家で中を抜けにな、どとを知ってい ても、次に行く所が見るタイプになっています。

D：：保存指定はある建物もいじり過ぎた、というんいいま すが、ミュージアムの場合は建築家で中を抜けにな、ジョンのデザインによって、スペースがすっと使いやすくなります。特別風称のギャラリーが設置され、常設スペース、図書室、教 育室、スタジオ、レストランをバー、メンバースルーム、シアターなどがあります。

T：：元の建物を設計したロジャー・カンリッキをオフィスに招いて、彼の意見もデザインに反映 させました。

D：：ロジャーは興味深い人物でしてね。このモニュメントを保護して頂けるなら、建築を中心で 田舎の農場に見せるようにしたいと彼は言ってました。

ーこのプロジェクトが終わったら、農場に開放してみたいなんて思いますか？

T：：実際、田舎にファームハウスを買って、改装中なんです 。

D：：ミュージアムは31年間の リ用はオープン予定です。そのときは、伸伸さんもぜひ来 てください。

TOP

ー伸伸証より三人へメッセージ

デアンデリスムの編集長だった時に、伊東豊雄さんが設計された白鳥がモダニアークの写真を 掲載してもらい、美しいレイアウトに感激したことを思い出しました。デアンの著書「巨大建 築という欲望」の中に紹介の中で、ジョンについてはいつさ ぞ行ってみたいと思っていました。 ぜ、ぜひいらっしゃいませ。この対談を通して解明しました。お二人がますます元気で活躍されることを期待しています。

ジョン・ポーソン
John Pawson

1950年生まれ、イートン校を卒業、陣への僧侶から日本へ。 鈴木安郎と小出志ゆから建築を目指す、ロンドンのAスクール に在籍後、私邸やギャラリーのデザインで、独自のミニマリズ ムを打ち出す。チェコのシャーン浪修道院、キューガーデン沢的 の時点で注目を集める。建築のほか、コットの内装、家具や キッチンデンス家で、トータルで独自の世界観を表現してい る。
http://www.johnpawson.com

デヤン・スジック
Deyan Sudjic

1953年生まれ、1982年、イギリスの建築&デザイン月刊誌「プルーフリット」の発刊に伴い、編集長を勤める。2000年頃、イタリア月刊誌の「ドムス」の編集長。その間、2002年のヴェネチア建築ビエンナレーのディレクターを勤める。2007年よりロンドンのデザインミュージアム館長に。著書歴歴、ジョン・ポーソン、エントト・ソットッサスの作品集など著書多数。
http://designmuseum.org

TOP

文：山下めぐみ（フリーエディター）
写真：鳥井良司（株式会社ナカサアンドパートナーズ）
編集：大原信子（株式会社ナカサアンドパートナーズ）

Copyright © 2022 Nacasa & Partners Inc. all rights reserved.